営みの基盤

－生態学からの文化的景観再考－

はじめに　景観研究室では、2015年11月28日から29日にかけて、文化的景観研究集会（第７回）「営みの基盤―生態学からの文化的景観再考」を開催した。

２日間を通じて、行政職員、研究者、コンサルタント、学生等、文化的景観に関わる様々な立場の約100名の参加を得ることができた。また今回の研究集会では、講演者の報告と討議から成るシンポジウム、「京都岡崎の文化的景観」でのエクスカーションに加え、初めての試みとしてポスターセッションを実施した。そこで本稿では、シンポジウム、ポスターセッション、エクスカーションの順に概要を報告する。

シンポジウムの目的　研究集会の目的は二点あった。

一つ目は、文化的景観の調査の際に念頭に置くべきとされている〈自然的特性〉の把握のあり方を、生態学の観点から再考することである。

地質や地形、気候が複雑に入り混じる日本では、自然条件の違いに即して、地域ごとに色とりどりの生きものの世界が育まれている。人も、多様な生きものの一員として、資源をうまく使いながら暮らしを繋いできた。文化的景観の調査では、地域の自然的特性と人々の営みとの関係を語る努力が求められているものの、現状では、対象地の自然環境の状況が淡々と述べられているにすぎないものが多々見受けられる。

二つ目は、変化する環境の中での折り合いのつけ方を、生態学の知見から学びたいということである。

地域は変化しながら生き続けており、それは生きものの世界として捉えられる。変化することを本質とする生きものの世界で、そのたくましさの基本は、環境変化への対応力・柔軟性といえ、近年、生態学ではそれをレジリエンスと呼ぶ。文化的景観においても急激な変化への対応力が求められており、生きものの世界から学ぶところが多いのではないかと考えた。

講演・報告の内容　シンポジウムでは、まず、基調講演として、佐久間大輔氏（大阪市立自然史博物館／植物生態学）から「絡みあう文化多様性と生物多様性」と題してご講演いただいた。続いて、各地での実例をもとに、深町加津枝氏（京都大学大学院／景観生態学）、高尾昭浩氏（奥出雲町教育委員会）、山下慎吾氏（魚と山の空間生態研究所／魚類生態学）、白川勝信氏（芸北 高原の自然館／植物生態学）の４名から研究報告をおこなった。

佐久間氏と深町氏、高尾氏からは、里地里山を対象に、「過去（特に近世～近代）」から「現在」にかけての人の暮らしと自然の相互関係についてご講演・ご報告をいただいた。３名からは、里地里山は文化そのものであるということ、また、文化的景観という見方で地域を見直すことで、生物多様性と文化多様性の関係、自然資源の利用や管理のあり方を丁寧にひも解き、未来へのつなぎ方が見出せることが示された。

山下氏は、四万十川流域におけるテナガエビの個体群変動モニタリングの調査から、テナガエビ漁を持続可能にするための漁のルールに関する提案をおこない、地域の人々が今後も生業の一部としておこない続けられる川漁の姿を具体的に示した。また、白川氏は、過去の地域のあり方を振り返りつつ、人と里山との関係、つながりを取り戻すための新たな仕組みの導入の必要性を述べ、広島県北広島町で実践する「芸北せどやま再生事業」の意味と展開について考察した。両者は地域の「現在」から「未来」にかけての人の営みと自然の関係に注目した実践的研究であった。

パネルディスカッションでの論点　パネルディスカッションでは、生きものの観点から、文化的景観の持続につながるものは何か、保全とはどういうことなのかを議論した。研究報告者４名に加え、モデレーターとして小浦久子氏（神戸芸術工科大学／都市計画学）、コメンテーターとして福井恒明氏（法政大学／景観工学）の参加を得て、計６名での活発なやりとりがおこなわれた。

まず、福井氏から各講演・報告の所感として二点の指摘があった。第一に、文化的景観からアプローチする際は、景観を、人を含む地域環境のシステムのあり方としてとらえており、生態学や土木学といった学術分野による違いがないということである。第二に、文化的景観での時間軸に対する意識の重要性である。つまり、過去から現在、未来にいたるまで、その地域での人と自然の関係から、どういう変化が起こってきたのか、起こりそうなのかを考えること、地域を一時点に固定して考えるのではなく時間軸を自由に行き来して考えることが肝要であろうという指摘であった。人の暮らしと自然との関係

は大きく変化しており、各発表者が自ずと変化をふまえるスタンスにあったことによるだろう。

討議でも変化について議論されたが、特にモニタリングについての意見が印象的だった。地域の特定の要素を定期的にモニタリングすることで、変化を読みとり、これから起こりそうなことを探知し、その対応策を事前に探り、修整していく可能性と重要性が示された。変化し続けることで持続している地域、つまり、文化的景観の保全を考えるとき、こうしたモニタリングの手法から学ぶことは多いだろう。

また、そのモニタリングを専門家に任せるだけではなく、地域住民自身でおこなうことの大切さも話題に上がった。定期的な点検作業に参加することで、自分たちの地域の変化への実感を得て、価値や今後のあり方を考えるきっかけにもなるということが話された。この議論の中で、山下氏から「モニタリングは未来を考える基盤」という重要な指摘もあった。

文化的景観では、計画や事業などの実施後にモニタリングをし、その結果をフィードバックすることが必要だといわれているが、現状ではそうした取組まで進められている事例は限られる。今後、研究においても実践においても、文化的景観におけるモニタリングの考え方や方法について深めていく必要があるだろう。

ポスターセッション　ポスターセッションは、文化的景観に関する情報共有を促し、速報的な研究や実践内容を議論できる場として企画した。発表テーマは研究集会の内容に限らず、文化的景観に関連する内容を対象とした。また、発表内容に応じて、学術研究部門、地域計画部門、地域活動部門という３つの部門を設けた。今回が初めての開催にもかかわらず、21名もの応募があった。

発表者の立場も発表内容も多岐にわたり、国内外の多くの事例が扱われたが、地域づくりを意識したものが多かったことが文化的景観の特質を物語っていただろう。

エクスカーション　エクスカーションでは、重要文化的景観「京都岡崎の文化的景観」を、京都市文化財保護課協力のもと１日かけて歩いた。途中に立ち寄った各施設ではゲストスピーカーからの話題提供も設けた。

文化的景観からみた岡崎エリアの現在の姿、その姿を支えている関係、また、その姿を紡ぎ出してきた歴史の蓄積のあり方について、ひとつの物語として理解されるように心がけながら解説した。各建物や庭園、そこでの営みは、単体として存在しているのではなく、関わりのなかで生まれ、生きている。解説しつつ実際に歩き、見たり聞いたりすることで実感できることは多いだろう。

来年度以降の研究集会も、シンポジウム、ポスターセッション、エクスカーションの３部構成で取り組んでいきたい。

（恵谷浩子）

図19　シンポジウムのようす

図20　ポスターセッションコアタイム

図21　京都岡崎でのエクスカーション